

# 感じたことや考えたことを自分なりに表現する生成過程における 家庭と園との連続性—考察

—身近な材料で描いたり、作ったりする造形表現を通して—

三上佳子\*

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

Continuity Between the Home and the Garden in the Generation Process that Expresses What  
You Feel and Think in Your Own Way-Consideration

Through modeling expressions that draw and make with familiar materials

Yoshiko MIKAMI

Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

抄録：子どもを取り巻く環境は、色鮮やかな遊具や操作することによって広がるバーチャルな世界を創るゲームなどで溢れ、子どもの表現も多様化している。一方、園の遊びや家庭から園に持ってくる子どもの造形表現をみると、空き箱など身近な材料にふれて感じたことを自分なりに主体的に表そうとする姿が見られる。そして素朴な表現の中に、「子どもの豊かな表現の世界」を見出すことがある。本論文では、身近な材料で感じたことや考えたことを自分なりに表現する生成過程における家庭と園の連続性について、家庭での造形遊びの実態も踏まえながら考察する。その結果、子どもの造形表現はものやひととの関係性の中でつくり出す喜びや意欲、そして自己実現や自己肯定感につながっていくことが見えてきた。

キーワード：表現の生成過程、家庭と園との連続性、表現を受け止める存在、身近な材料、  
自己実現・自己肯定感

## 1. はじめに

元来、子どもは身近なものにふれ、それを使って思いのままに描いたり作ったりするのが大好きである。津守は「子どもの行為の展開の中に、子どもの世界は表現される。」「保育者は、子どもが遊ぶ行為の中に、その子どもの世界の本質の表現を見ることができる。」と述べている。<sup>1)</sup>保育者は日々の遊びや表現を手がかりにして、子どもの世界を理解することが求められている。また郡司は、子どもというのは「知りたい、わかりたい、出来るようになりたい、そのために行動したい。」という根源的な

---

\* E-mail: y-mikami@sumire.ac.jp

能動性に基づく存在である。そしてそれらの出来事を身近な人に伝え、分かち合いたいという思いが「表現」の源であり、造形表現の特性は「もの」（こと、人、場所）との対話であると述べている。そして、保育者をはじめとする大人が、子どもの素朴な表現からそこに込められた思いを汲み取り、受け止め共感できるとき、子どもの表現への意欲は一層育まれると言及している。<sup>2)</sup>

今回、新型コロナウイルス感染拡大防止として、2 が月ほど休園をした幼稚園が多かった。本学の附属幼稚園でも、2 カ月等を休園したが、その間に「チャレンジ 40」と称し、家庭の協力も得ながら、子ども達が自分の得意なことにチャレンジできるようにした。造形活動のチャレンジをみると、毎日女の子を描き続けたり、いろいろなものを作ったり、40 匹の動物を描いたりした。（資料 1）また園が再開した後も、空き箱でつくった「ギター」を家庭から持ってきて、「園で続きを作る」と話す姿もみられた。休園期間、子どもの造形表現は、今まで以上に家庭と園生活との連続性の中で培われ、家庭と園が子どもの表現を共有していく機会にもなったと感じた。そのため、保育者は家庭と園との連続性を意識し、表現行為の生成過程に思いを寄せ、関わっていくことが求められると考える。本論文では「感じたことや考えたことを自分なりに表現する生成過程における家庭と園との連続性」について、家庭や園における子どもの造形表現の実態や実践を通して考察していく。

資料 1 チャレンジ 40 より

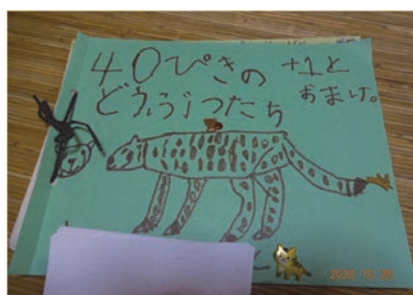
毎日大好きな女の子の絵を描く



40 日間描いたり作ったりするチャレンジ



40 匹の動物たち



## 2. 自分が感じたりや考えたことを自分なりに表現する生成過程について

### 2.1 保護者アンケートの実施

本学附属幼稚園の 5 歳児 2 クラスの保護者を対象に、家庭における子どもの造形遊び（今後、造形表現と表記）について、保護者へのアンケートを実施した。家庭での子ども造形表現や保護者の思いや願い

を知ることは、感じたことや考えたことを自分なりに表現する子どもの実態や、保護者と子どもの素朴な表現の中にある「子どもの豊かな表現の世界」について共有していくきっかけにもなると考えた。

また、保育者にとっても、感じたことや考えたことを自分なりに表現する生成過程における「家庭と園との連続性」を学ぶ機会であり、保護者に子どもの素朴な造形表現の意義を伝える機会にもなると考えた。（表1）

＊この研究は滋賀短期大学研究倫理委員会の審査を受け了承済です。

表1 「家庭における造形あそびについて」保護者アンケート

家庭における造形遊びについて（年長組 アンケート）	
<p>・園では、身近な材料を使って描いたり作ったりするなど造形遊びを楽しんでいます。今回、ご家庭で、描いたり作ったりしている様子をお教えいただき、子どもの素朴な表現について、研究していきたいと考えています。</p> <p>該当のところに、○をしていただき、記述にご協力ください。</p> <p>・ご回答いただいた内容は、本研究以外の目的に使用することはありません。また回答いただいた内容は個人が特定されないようにしていますので、ご協力よろしくお願いいたします。アンケートにご記入の上、9月18日（金）までに各担任にご提出ください。</p>	
<p>① 家庭で描いたり作ったりしている</p> <p>はい    ときどき    あまり</p> <p>はい・ときどきと答えた方はどのような遊具や材料で描いたり作っていますか？</p> <p>例・ブロックで○を作る、空き箱で○を作る。折り紙で○をつくる。紙に絵を描いたりする。</p>	
<p>② 身近な材料(空き箱等)で作ったり、紙に絵を描いたり、折り紙をしているのを見て、子どもの表現が素敵だと感じたことがありますか？</p> <p>はい    ときどき    あまり</p> <p>はい・ときどきと答えた方はどのような表現をした時、そう思いましたか？</p> <p>例・絵を描いた時、友達と～したなど描いたことを話した。○と○の空き箱をくっつけて○○といった。</p>	
<p>③ 子ども達が、家庭で描いたり作ったりしたのを園に持って行ったり、園から帰って描いたり作ったりしているのを見て、感じられたこと、願っておられることを自由に記入してください。</p>	
ご協力ありがとうございました。	

## 2.2 生成過程にみえる「家庭と園との連続性」「表現を受け止めてくれる存在」「互いに影響し合える友達の存在」

表1のアンケートでは、①『家庭で描いたり作ったりしているか』という問いに対して「はい」が85.7%、「ときどき」が8.6%、「あまり」が5.7%であった。また「はい」「ときどき」と答えた人で『どのような遊具や材料で描いたり作ったりしているか』の問いに対して、表2に示しているように、身

近な材料や紙で作ったり描いたりすることを楽しむ姿が多く寄せられた。また既成の遊具においても、自分で考えて作れるブロックやレゴ、ラキュー、ビーズ等が人気であった。(表 2)

②『身近な材料で作ったり、紙に絵を描いたり、折り紙をしているのをみて、子どもの表現が素敵と感じたことがあるか』の問いでは、「はい」が 91.4%、「ときどき」が 8.6%、「あまり」は 0%であった。『どのような表現をした時、子どもの表現が素敵と思ったか』の問いについては、表 3 に示しているように「その子らしさの表現や工夫」「作ったものに心を寄せている時」「見立て・創造力の豊かさを感じた時」が挙げられていた。家庭と園は、子どもの造形表現を介して「子どもの豊かな表現の世界」を共有する機会にもなっていた。そして表現の生成過程は、家庭と園で相互に行き交うものや遊びへの思いの連続性の中で、培われていることが見えてきた。(表 3)

③『子どもたちが家庭で描いたり作ったりしたものを園に持っていったり、園から持って帰って描いたり作ったりしているのを見て感じたことや願っていること』については、表 4 に示しているように、「家庭と園の相互で見てほしいという気持ちや意欲が家庭と園との連続性を生んでいる。」「造形表現を介して友達と互いに影響し合える関係性を育んでいる。」「自分で感じたことや考えたことが自分なりの表現につながっている。」など子どもの育ちの要因も挙げられていた。(表 4) 感じたことや考えたことを自分なりに表現していくためには、表現を受け止めてくれる存在や相互に影響し合える友達の存在が重要になってくることが考えられる。

表 2 家庭でどのような遊具や材料で描いたり作ったりしているか(記述)

○空き箱等の材料 24 (武器 3, 家 5, 宝石箱 2, カメラ 1, 体温計 1, ギター 1, 車紙道路 1, 望遠鏡 2, パソコン, リモートキーボード 4, アコーディオン 1, ピタゴラ装置 1, 卵パックと芯や紙皿で小鳥 1)

○折り紙 35 (虫 4, 小動物 4, 花 2, キャラクター・ロボット 3, 手裏剣, 鉄砲 1, ままごと道具 1, 洗濯かご 4, 家・人形 1, ステッキ・ハート 1, 星 5, 立体公園 1, 絵本 1, 食べ物 1, ティッシュいれ 1, 絵を描いて手紙にしてハートで折る 1, 切り紙 3)

○段ボール 8 (剣 2, 鉄砲 1, 家 2, パソコン・ファミコン 2, 耳飾り 1)

○新聞紙・広告紙 2 (剣 1, 紙飛行機 1)

○ペットボトルのふた 2 (タワー 1, 船 1)

○紙等 3 (絵本 1, アクセサリー 1, 立体の家 1)

○小麦粉粘土型抜き遊び 1

○石鹸づくり 1

○ブロック 2 (お城 1, 幼稚園 1)

○レゴ 4 (乗り物 2, お店 1, 家 1)

○ビーズ 1 (アクセサリー 1)

○お絵描きボード 1

○ラキュー 2 (テーブル 1, 虫 1)

○アイロンビーズ 2 (キャラクター)

紙で絵を描く 24 (好きな絵 14, 動物 4, 文字 1, 家族 2, 幼稚園の様子・友達 2, 絵の具で 1)

表3 どのような表現をした時、そう思ったか（子どもの表現が素敵と思った）記述

○その子らしい表現や工夫

- ・ 絵の色の使い方が個性的。チータなどよく特徴をとらえている。
- ・ 折り紙で切り方・折り方を工夫。
- ・ 描いたものに丁寧に色を塗る。集まれ動物村を空き箱や折り紙で再現。万華鏡を絵で再現。鬼滅の刃のたんじろうのイヤリングを段ボールで作る。図鑑をみて、特徴をシンプルに捉えている。夏の生きものをその子の捉え方で描いている。ウサギの折り紙の顔が子どもらしい。
- ・ ラキューが独創的。折り紙で立体的にしようと工夫。空き箱や糸等で iPad やDS パソコンを本物らしく作る。空き箱物を細の字や絵を上手に切り取り、レストランのメニューにしてごっこ遊び。お天気マークをペーブサートにしてTVの天気予報を再現。絵本作り⇒家族で出かけたことや好きな本をリメイク（子ども目線でかわいい）自動販売機では、お金を入れて購入できるようにしている。季節を意識している。

○作ったものに心を寄せる。

- ・ 描いた絵を物語にして話してくれた。母と自分を描いてプレゼントしてくれた。折り紙のハートをくっつけて花束にし、「目をつぶって」と言ってプレゼントしてくれた。捕まえた虫の絵を描いた時、虹や花を描き「虫さん喜ぶかな」と話していた。「〇ちゃん(友達)はピアノが好きだから」といって、友達の顔の横に音符を描いていた。
- ・ 大きくなったら作った家に住みたいと言った。家族分の歯磨き粉を作ってくれた。

○見立て・創造力の豊かさ

- ・ 空き箱の家の中で、家族全員を作り ごっこ遊び。
- ・ ペットボトルのキャップでごっこ遊び。
- ・ 線から、ゾウに目立てる。⇒草原等を描く。TVでみたサバンナを想像する。

また、保護者の造形表現を通して願うことの記述に、「とりあえずやってみようとするチャレンジ精神（意欲）。」「身近にあるもので楽しみながら作ってほしい。」「感じたことや考えたことを自分なりに表現してほしい。」が挙げられていた。（表4）家庭における造形表現の願いは、保育者が願っている子どもの育ちと共通しているところもあり、造形表現を介して子どもの育ちについて相互理解をしていく機会になっていくと考えられる。

表4 子どもたちが家庭で描いたり作ったりしたものを園に持っていったり、園から持って帰って描いたり作ったりしているのを見て感じたことや願っていることについて

○園で先生や友達・おうちの人に見てもらいたいという気持ちや意欲が家庭と園の連続性になっている。

- ・家庭で作ったものを嬉しそうに説明をする。友達にプレゼントしたいという思いで作って園にもって行く。
  - ・園では家で作ったものを紹介する場があり、わが子がみんなの前で紹介されるのがうれしいと話をしている。
- 保育者が子どもの家庭での自由な発想や表現を受け入れてくれると感じる。

○造形表現を介して、友達と互いに影響し合える関係性を育んでいる。

- ・友達が作ったものを家で真似て作っている。刺激されてやってみることは素敵と思う。友達に作り方を教える喜びで達成感や自己肯定感を味わい自信が持てている。また教えてもらう喜びもあり、互いに影響し合っている。

○自分で感じたことや考えたことを作ろうとするなど自分なりに表現につながっている。

- ・何を使ったらイメージしているものが作れるかを考えて作っている。何を作ったかを聞くと、予想されない考えや発想に驚く。子どもの柔軟性に感動する。・作ったものから、わが子の思いや今、興味関心を示していることが見えてくる。

○園での造形表現の経験が家庭につながっている。

- ・木工の遊びなど家ではできない豊かな経験をさせてもらっている。園で、思いやイメージを実現しようと考える取り組みんでいることが家庭でも見られる。

○今ある発想力でつくる楽しさを満喫してほしい。

#### 造形表現を通して願うこと

- 創作意欲 ○手先の器用さや想像力はもちろんであるが、とりあえずやってみようとするチャレンジ精神
- 身近にあるもので楽しみながら作ってほしい。 ○優しい顔や優しい動物など子どもの絵をみるとほっこりする。
- 作ったものを遊びに使ったり、遊びに使うために作ったりする表現力 ○自分の感じたことや考えたことを自分なりに表現してほしい。 ○いつまでもきれいなものが好きという心でいてほしい。○幼児期にたくさんの人と触れて、大人では思いつかない表現をしてほしい。
- 今ある発想力でつくる楽しさを満喫してほしい。



### 3. 園における子どもの造形表現（作ったものへの思い・家庭と園との連続性）について

事例1 身近な材料で描いたり作ったりする 5歳7月（モモ、ミツキ、ナオ）

#### 事例1 「作って何しようかな?」「素敵な女の子ができた」

8月、モモとミツキは、登園してくると空き箱や広告紙等を使ってプリキュアの変身グッズを作り始める。モモはスティックを作ると動かしてみる。ミツキはポシェットを作り、開け閉めができるように新聞紙で工夫して作っている。できると互いに顔を合わせ、保育室から出る。プリキュアに変身して園舎を駆け回り遊んでいた。朝の会が始まる時間になると、作ったものを補強したりしながら「明日、お休みな。家の用事で休むようである）持って帰って遊ぼうね」と話をしていた。

同じテーブルには、ナオが紙で女の子を作っていた。掌に乗せられるほどの大きさの女の子を集中して作っている。モモやミツキと会話は無いが、女の子に合わせた服を作っている。出来上がると、しばらくつくった女の子をみて、丁寧に自分のお道具箱にしまった。お道具箱には、ナオが作ったいろいろな女の子たちが入っていた。



登園直後の遊びは、子ども達にとって昨日の遊びや家庭での生活や遊びに連動していることがある。モモとミツキは気の合う友達であり、互いにプリキュアという共通のイメージで、自分なりにスティックやポシェットを制作し遊んでいた。作ったもので遊ぶ、遊んだものを家でも使うというサイクルは、子どもの主体的な表現の生成過程において、作ったものへの愛着や誰かに見せたい、作ったものをよりよくしたいなど意欲にもつながっていると考えられる。また紙でいろいろな女の子を作り、道具箱に入れたナオも、作った女の子を自分で選んで家に持って帰っているとのことであった。女の子は家庭と園で遊ぶ友達であり、ナオ自身の遊びへの思いを家庭と園をつなげている存在なのかもしれない。保育者は、子ども達が作ったものを園の遊びに使ったり、作ったものを持って帰り家庭でも遊んでいる姿を知ることによって、自分なりに表現する生成過程が園だけで完結していない場合もあることを理解する必要があると感じた。そして園の環境に家庭にもある空き箱や広告紙など身近な材料を意図的に置いておくことによって、子どもの主体的な表現の生成過程は、家庭と園との連続性の中で、自己実現し、より豊かになっていくことがみえてきた。

### 4. 子どもの造形表現を支える保育者の役割

#### 4.1 造形表現を支える保育者の関わりについて

今回のアンケートで、保護者から多数寄せられたのが「園では家庭で作ったものを紹介する場があり、子どもにとってもみんなの前で紹介されるのがうれしい」「子どもが家庭から作ったものを園に

持ってきた時、自由な発想や表現を受け入れてくれる保育者の関わりが支えになっている」という記述があった。

園生活の自らすすんでしている遊びの中で、子どもが感じたことや考えたことを自分なりに表現する生成過程に出会うことがある。幼稚園教育要領第2章「ねらい及び内容」の領域「表現」3「内容の取扱い」では、「(2)幼児自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること」等が記載されている。<sup>3)</sup>小林は、次の(3)内容の取扱いも含め、保育者が個々の表現の「よさや可能性」を受容すると同時に環境を整え援助する重要性が示されていると述べている。また「保育の場に参加するすべての人々が、互いに表現者であり、かつその相手の言動としての表現がもつ審美性\*を敬いつつ保育が展開されている」と述べている。保育者の子どもの造形表現への見方や関わりによって、子どもが自分なりに表現する生成過程はより豊かになり、子どもの育ちや家庭と園との連続性につながっていくと考えられる。本学の附属幼稚園の事例を通して考察してみる。<sup>4)</sup>

\*審美性とは、秋田によると「審美性とは、私たちの身の回りのものに対する共感の態度であり、参加や関心を持つことによって、今ものよりもよりよいものへという志である。」と述べている。<sup>5)</sup>

事例2 自分なりに表現を支える保育者の関わり 5歳児6月(メグ、シズカ、カノン)

### 事例2 「パパにお手紙かくの」

6月、4名の子ども達は、登園してくると再生紙の裏に好きな絵を描き始める。保育者を見つけると描いた絵を見せる。メグが「これ男の子と女の子・・・」と話し始めると、保育者は「この子とこの子何が違うの?」と聞き始める。メグは「髪の毛の長いこの子が女の子で・・・」と楽しそうに話を始める。保育者は真剣に聞いている。シズカは丁寧に色を塗っていた。出来上がると保育者に「ママとパパ・・・」と一言話す。



保育者が「ママおしやれね。パパもおしやれ」と伝えると、シズカは笑顔で「パパにお手紙かくの」と伝え、また描き始める。カノンは「これなんだかわかる?」と保育者に尋ねる。保育者が考えていると、カノンは「あのね・・・」と話し始める。保育者は「・・・そうか」といって話を聞いている。

保育者は、子どもの造形表現を介して、その子の感じたことや考えたことを受け止め、楽しみ、そして一人一人に応じた言葉をかけている。シズカは保育者に認められたことで、父親に手紙(絵)を渡そうと考える。保育者の関わりが、描く楽しさや描いた人に思いを寄せる行為につながっている。またメグやカノンは、自分の描いた絵について話をするすることで、描いたものに心を寄せていた。保育者



は子どもが絵を見せにくるとき、描いているものへの思い等を引き出すことで、子どもは自分なりの表現への自信にもなっている。

保護者アンケートの中で、「子どもが描いた絵を物語にして話をしてくれる。」「折り紙のハートをくっつけて花束にし、『目をつぶって』と言ってプレゼントしてくれた。」という記述があった。子どもの表現は、受け手である保護者にとっても大きな喜びとなり、その喜びや愛情が、子どもの自己実現や自己肯定感にもつながっていくと考える。

#### 4.2 造形表現を介して家庭と園との連続性を支える保育者の関わりについて

保育者は、保護者に子どもの表現の意味やその表現の生成過程を伝え、共有し、子どもの造形表現を支えることが必要である。高橋は、幼児期の過程における造形活動と人的環境としての保護者との関わりが大事であり、子どもが「自分らしい表現の仕方を発見し、身につけることができる」そして保護者と子どもが「作る楽しさの共有」や「感動体験の自己表出」をしていくことが望ましいと述べている。<sup>6)</sup>

保育者や保護者は、受け手であると同時に、表現者でもある。保育者がつなぎ手となり、子どもの造形表現のよさを家庭と共有し、保護者や保育者も感じたことや考えたことを自分なりの表現していく双方向の関係性が子どもの表現をより豊かにしていくと感じる。そして子どもの造形表現は家庭や友達や保育者など人との応答性の中で、つくり出す喜びや意欲が生成され、自分なりに表現する楽しさが自己実現や自己肯定感を醸成していくと考えられる。

### 5. おわりに

附属幼稚園には、教育実習をはじめ学生の学びの場として継続して保育観察に協力を得ている。参観に行くと、毎朝、子ども達は身近な材料を使って、描いたり作ったりしている。感じたことや考えたことを自分なりに思い思いに表現している姿をみて、その表現の生成過程は何なのかを考えた。その時、附属幼稚園の小野園長から「日頃から保育者が家庭で作ったものをみんなに紹介したり、園で作ったものを家でも作ったりしている。」「新型コロナウイルス感染症のため2か月の休園期間に、『チャレンジ40』を開催し、家庭で子ども達が取り組んだことを紹介し、一人一人を表彰した。」という話を伺う。(資料2)家庭と園との連続性を意識した取り組みが、子どもの造形表現をより豊かにしていると考えた。今回、附属幼稚園5歳児の保護者の方のアンケートのご協力によって、「家庭での造形遊びの様子」や「子どもの造形を介して家庭と園とのつながり」や「保護者の子どもの育ちへの願い」について知ることができた。まだ園の取り組みとして、①保育者が家庭にもある身近な材料を使って描いたり作ったりする場を継続して保障する。②保育者がつなぎ手となって、友達と互いのつくったものを見せ合う機会をもつ。③子どもが感じたことや考えたことを自分なりに表現し見せてきてくれた時、丁寧に受け止め、思いを引き出しながら表現する楽しさを支える。④バス通園のた

め、通信やコミュニケーションで保護者に子どもの表現を伝える工夫をするなどがあげられた。

今後も通常の園生活が出来ない事態になることも予想される。その時、家庭と園が、子どもの主体的な表現を尊重し、相互に行き交うものや遊びへの思いを大切に、連続していることを意識して関わっていくことが、より求められると考える。子どもが感じたことや考えたことを自分なりに表現し、自己実現や自己肯定感を育んでいくように、家庭との連携がより推進していくことを期待したい。

今後、表現の生成過程における家庭と園との連続性について、実践から検証していくとともに、表現を支え、保護者とのつなぎ手としての保育者の役割についても、再考していきたい。

## 謝辞

本研究を遂行するにあたって、本大学の附属幼稚園小野清司園長をはじめ、5歳児の担任である近藤鉄矢教諭、大谷薫教諭そして5歳児の保護者の皆様に協力をいただいたことに、深く御礼申し上げます。

資料2 附属幼稚園における「チャレンジ40」の取り組みによせて



## 文献

- 1) 津守 真著(1987)「子どもの世界をどう見るか：行為とその意味」P14 日本放送出版協会
- 2) 砂山史子 郡司明子著 無藤隆監修 浜口順子編集代表 (2018)「事例で学ぶ保育内容 領域 表現」P188 萌文書林

三 上 佳 子

- 3) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」(2018) P245 フレーベル館
- 4) 小林紀子 砂上史子 刑部育子編著(2019)「保育内容 表現」P15～P16 ミネルヴァ書房
- 5) 秋田貴代美編(2013)「レッジョ・エミリアに学ぶ保育の質」P15 子ども学 東京大学
- 6) 高橋敏之編(2002)「幼年期の家庭における造形活動と人的環境としての保護者とのかかわり」P12 日本家庭教育学会誌「家庭教育研究」第7号